

編集にあたって

PICS 診療と救急・集中治療

PICS 診療実践マニュアルを手にとってくださりありがとうございます。本書は日本集中治療医学会 PICS 対策・生活の質改善検討委員会のメンバーが中心となって執筆しました。マニュアルを提示するために特別に複数のシステマティックレビューを行い、最新のエビデンスに基づいた PICS 診療のあり方をわかりやすく 1 冊の本にまとめたものとなります。本書では Post-Intensive Care Syndrome (PICS) に関連して行うべき評価や治療、対策、ICU ケアを広く含めて PICS 診療という言葉で表現し解説させていただいております。

これまで、PICS にマニュアルと言えるようなものは存在しませんでした。それゆえに（自分も含めて）各施設では手探りに PICS 診療を行ってきたと言っても過言ではないと思います。しかし、PICS というコンセプトが提唱され 10 年が経過し、PICS 診療はエビデンスや経験を蓄積することで、一定の潮流を成しながら発展を続けてきました。その結果、現在では PICS 診療のあるべき形の方向性が提示できるようになり、本書はそれらをはじめとまとめ上げたものと言えます。そう遠くない未来に PICS フォローアップに何らかの加算が付き、国をあげて PICS 診療を行う時代が来るでしょう。それを見据えて各施設が PICS 外来や PICS ラウンドをスムーズに導入し、世界に先進する PICS 診療を展開できるようにと、メンバー一同思いを込めて作成したのが本書「PICS 診療実践マニュアル」なのです。

日本で特に PICS 診療の必要性が認識されるようになった理由は、高齢化社会で著明な PICS をきたす ICU 生存患者が多いこともありますが、PICS が「看護の目的」の中心をとらえるものであったからと自分は考えています。日本看護協会が掲示する看護師の役割は健康の増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和の 4 つにあるとし、そのホームページの中で看護の目的とは「本来その人がもつ自然治癒力に働きかけ、回復しやすい環境を整え、健康の保持増進や、病気の予防や苦痛の緩和を行い、生涯を通して、その人らしく暮らしていくことができるよう、身体的、精神的、社会的に支援すること」としています。これは PICS 診療のコンセプトそのものではないでしょうか。特に救急集中治療において、救命のみならず中盤以降の回復に向き合い支援することは、看護師のみならず急性期診療にかかわるあらゆる職種が考えねばならない重要事項と言えるでしょう。

私自身の PICS 診療はやはり前任地の日立総合病院 PICS 外来とともにありました。そのきっかけとなったのは、西田修先生から PICS 委員会への参加についてお声がけいただき、その初回の委員会の際に「PICS 外来をやってみてくれないか」と指命を受けた

ことでした。その後の委員会や研究活動を経て、西田先生監修の下で本書の発刊に至ったことは非常に感慨深いものがあり、西田修先生にこの場を借りて謝辞を申し上げたいと思います。そして日立総合病院救命救急センターにはその土壌ができていと確信していたこともあり、理想に向けて急速に準備を進め、およそ半年ほどで始動に至ることができ、日本でも有数のPICS外来運営施設となりました。日立総合病院救命救急センターの医療スタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。

しかし、PICS診療には解決すべき問題がいまだたくさんあります。すべての患者をフォローアップすることは困難であり、今後は電話や遠隔診療などのITも駆使しながら効率的なPICS診療の方法を開発していく必要があります。メンバー一同、そして皆様と、PICS診療のさらなる発展をめざしていけたらと思います。その第一歩として、まずは日常臨床にPICS診療をとりいれるため、本書をお役立ていただけましたら幸いです。

2023年12月吉日

横浜市立大学附属病院集中治療部
中村謙介